

大宜味村史

通史編

村 章



大宜味村の「大」の文字を近代感覚により図案化したもので、村民の融和団結を円で似て表し、さらに村勢の雄飛発展を左に伸びる翼形で表現、輝く大宜味村の将来を端的に力強く象徴したものである。

1972（昭和 47）年 1 月 1 日制定

大宜味村民憲章

2018（平成30）年6月1日（大宜味村告示第29号）

わたしたちの村、大宜味村は、やんばると呼ばれ山・川・海などの豊かな自然に恵まれ、地域資源と共存し、村是である「人材を以って資源と為す」を精神的支柱として発展してきた誇り高い歴史と文化があります。

わたしたちは、先人から受け継がれてきたこの貴重な精神を財産にして、互いに支え合い、ふるさとに誇りをもち、平和の村をつくっていく決意を示すものとして、ここに大宜味村民憲章を定めます。

わたしたち大宜味村民は、

- 一 先人の教えを尊重し豊かな心を育む村をつくります
- 一 豊かな自然に恵まれた歴史文化の薫り高い村をつくります
- 一 思いやり支え合う結の心で住みよい村をつくります
- 一 身も心も健康で活みなぎる明るい長寿の村をつくります

※上記の村民憲章の制定により、長年、村民に村是として認識され、親泊朝擧先生（大宜味小学校初代校長）が学校経営目標として提唱された、「人材を以って資源と為す」という言葉が、「村是」として位置づけられた。

村 歌

平 田 嗣永 作詞

伊志嶺 朝次 作曲



1. 東支那海 海蒼く

黒汐岸に 寄るところ
緑の山に 囲まれて
流れる清水 汲みて飲む
ああわが大宜味は ここにあり

3. 塩屋の橋に 陽は映えて

建設の槌 音高く
文化の花の 咲くところ
望みあふれる 理想郷
ああわが大宜味の 誇りなり

2. 鈴なるみかん 黄金色

その名も高き 糸芭蕉
はた機織る村の 乙女らの
情けは深く 語り草
ああわが大宜味は 豊かなり

4. 生気みなぎる その中で

平和な村を 築くよう
われら進まん 一筋に
行こうよみんな まっしぐら
ああわが大宜味に 光あり

大宜味音頭

平 田 嗣永 作詞

伊志嶺 朝次 作曲

1. ハーア やまのみどりに ひはは えわ たー
り ながめ う る わ し し お
や の は しーよ われらが し まーん み
にー お しゃ れ さっさおどろよ おおぎ みおんど
手拍子 あわせて (ソレ) にぎや かー に

1. ハー山^うの緑に 陽は映え渡り
眺め^{うる}麗し 塩屋の橋よ
われらが自慢 見におじゃれ
サアサ踊ろよ 大宜味音頭
手拍子合わせて
ソレ にぎやかに

2. ハー山のみかんも 黄金^うに熟れて
小歌まじりに 摘む手^{かろ}も軽く
われらが誇り みかん村
サアサ踊ろよ 大宜味音頭
手拍子合わせて
ソレ にぎやかに

3. ハー^{はた}機^ねの音高く 織りだすばしょう布
むらの乙女の 情けが通う
着せてあげたや あの人の
サアサ踊ろよ 大宜味音頭
手拍子合わせて
ソレ にぎやかに

4. ハー老いも若きも 手に手をとって
大宜味音頭 踊ろじゃないか
三味の音高く にぎやかに
サアサ踊ろよ 大宜味音頭
手拍子合わせて
ソレ にぎやかに

大宜味村の花、大宜味村の木、大宜味村の鳥

〈1987（昭和62）年8月1日制定〉



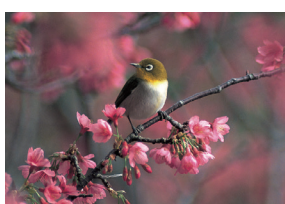
大宜味村の花 シークワーサー

シークワーサーの花色は純白でやさしい香りがし、純真で、清楚で、大宜味村のイメージにマッチする。



大宜味村の木 シークワーサー

古くから村内の山野に自生した在来種で、個性豊かで、特異性があり、適度な酸っぱさと味と香りは大宜味村の味として県下で広く親しまれ、村の代表的な特産物として発展している。



大宜味村の鳥 メジロ

家庭の庭先まで飛来し、花から花へ飛び交いさえする風情は、広く村民に親しまれている。



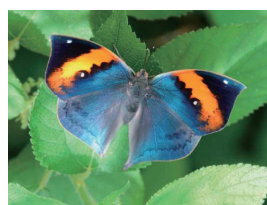
大宜味村の鳥 ホントウアカヒゲ 〈2025（令和7）年2月17日制定〉

本村では昔から馴染みのあるちょうであるが、国指定天然記念物や国内希少野生動植物に指定されている貴重な鳥。令和6年9月には日本鳥類学会発行「日本鳥類目録改訂第8版」で固有種と位置づけられた。オスは上面の羽が茶褐色で胸部が色、メスは上面が淡い赤褐色で胸部は灰色になっているのが特徴。

※メジロも引き続き村の鳥として制定されている。

大宜味村の蝶々

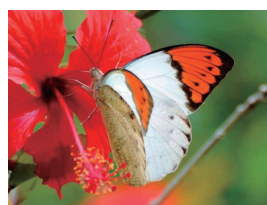
〈2017（平成29）年2月22日制定〉



コノハチョウ

沖縄県指定天然記念物（1969年）にも指定されており、準絶滅危惧種（環境省レッドリスト）でもあることから、保全の必要性があり、自然環境保全の観点から選定に値するものである。また、翅（^{はね}裏側）の模様が枯葉に似るため擬

態の特徴と、翅を広げた表側は色鮮やかであり、見る者を魅了する。食草として、幼虫期は自然度の高い、大宜味の森にも自生するオキナワスズムシソウを食草とし、成虫になると村木であるシークワーサーの樹液を好むため、村の特性と合致した種である。



ツマベニチョウ

九州からアジアにかけて多く分布するチョウで、沖縄各地で個体数が多く見られ、本村においても一年中見ることができる種である。

「幸せを呼ぶチョウ」とも言われており、また、南国の風景に存在するブツソウゲに飛来する姿が多く見られ、村内においても様々なところで見かけることから観光振興、エコツーリズムの波及に寄与される見た目に美しい蝶である。

※表記について

蝶の由来が「てふてふ」→「蝶々」（ちょうちょう）であり、童謡の「ちょうちょう」などで親しみやすい呼び方でもあること、本件に選定された「蝶」も2種を選定することに意味を込めて「蝶々」（ちょうちょう）とする。

大宜味村の4つのキーワード

《長寿の里》

美しい青い海と豊かな緑に囲まれた大宜味村は、1993年に健康な高齢者の割合が日本で最も高い地域として、大宜味村老人クラブ連合会が「長寿の村日本一」を宣言した。

この宣言は、村の誇りである長寿をアピールし、村の産業の発展のきっかけにしたいという思いが込められている。



日本一長寿宣言の村の碑

「長寿日本一宣言」

日本一長寿沖縄県、沖縄一長寿大宜味村、我々大宜味村老人は、自然の恵みにその糧を求める伝統的食文化の中で、長寿を全うし、人生を謳歌している。
八十(歳)はサラワラビ(童)、九十(歳)になって迎えに来たら、百(歳)まで待てと追い返せ。

我らは老いてますます意気盛んなり、老いては子に甘えるな。

長寿を語るなら我が村に来たれ、自然の恵みと長寿の秘訣を授けよう。

我が大宜味村老人は、ここに長寿日本一を高々に宣言する。

平成5年4月23日

大宜味村老人クラブ連合会

《芭蕉布の里》

沖縄の誇る伝統工芸

「喜如嘉の芭蕉布」は沖縄が日本に復帰すると同時(昭和47年)に、県の無形文化財に指定され、その2年後には、国指定の重要無形文化財となり、沖縄を代表する伝統工芸品として認知されるようになった。

技術者の高齢化と後継者不足により、生産量は徐々に減少していくが、品質と社会的評価はますます高まり、昭和56年にはポーラ伝統文化振興財団から第1回伝統文化ポーラ大賞を授与され、記録映画「芭蕉布を織る女達」が製作された。

昭和61年には、村立芭蕉布会館が完成し、生産拠点・後継者育成施設であると同時に、多くの人が訪れる芭蕉布のPR施設となっている。

糸芭蕉の用途は芭蕉布だけにとどまらない。表皮は芭蕉紙の原料、ブーケやしおりなど、ペーパークラフトの素材としてもよく利用されている。また、糸にできない外皮の繊維は沖縄各地の獅子舞の獅子の毛として使用されている。そのほか、芋炊きに使った後の木灰は焼き物の上薬に使われるなど、その波及効果は多方面に渡っている。

現在、織り手の高齢化や後継者不足など不安材料は多いが、多くのみなさんのご理解と支援を得ながら大宜味村のみならず沖縄が世界に誇れる伝統工芸、喜如嘉の芭蕉布を今後も守り育てていきたい。



糸芭蕉の畑



芭蕉布反物

《ぶながやの里》

ぶながやの里宣言

私たちの大宜味村の森や川には、今ではここにしか生息しなくなった「ぶながや」が棲んでいる。「ぶながや」は平和と自然を愛し、森や川の恵みを巧みに利用し、時折私たちにその姿をみせてくれる不思議な生き物である。

第二次世界大戦以前は、沖縄のほとんどの村々で暮らしていた「ぶながや」たちは、激しい戦禍と基地被害、戦後復興の近代化に耐えきれず、かつてのふるさとを離れ、20世紀最後の安住の地を求め、豊かな自然と人々の清らかな心に惹かれ、大宜味村に命を永らえるようになったという希少種族である。

私たち村民はこれまで、戦争につながる一切を認めずにくらししてきた。それが平和な国際社会を築くことに大きく貢献していることにいささかの誇りを持ち、その気持ちを21世紀に向け、内外に発信したいと考えている。それは「ぶながや」たちが、私たちに語ること無く教えてくれてきたことだと気づくようになった。

私たち村民は、村政90周年にあたり「ぶながや」たちと生きてきたことに誇りを持ち、これからもこの大宜味村の豊かな自然の中で共生し、平和で文化の薫り高い豊かな村づくりに取り組むことを決意し、ここに「ぶながやの里」を宣言する。

1998年7月24日



ぶながやの里宣言の碑

《シークワサーの里》

大宜味村シークワサーの里宣言

我が村における「シークワサー」は、自然の恵みを大事に守り育ててきた、先人たちの大きな〈食文化〉〈知恵〉の遺産である。

昔から野山に自生したミカンを食し、生活に取り入れ、シークワサーと命名し、大事に育み、今日見る村の大きな財産へ発展、継承されてきた。

山に里に軒先にと、たわわに実る黄金色したシークワサーは、「クガニ」とも呼ばれ、そうした先人たちの心〈想い〉をのせた豊かさへのメッセージであり、そして本村のシンボルイメージとなった。

五弁の白い花は目に優しく、香りは心を癒し、ほどよい酸味の果汁はまさに天下一品である。近年、健康に美容にと、大宜味村シークワサーへ寄せる県内外からの期待も大きい。

沖縄一の生産量を誇り、加工施設も完備した今日、名実ともに本村の基幹産業として、村民が一丸となって取り組むことを確認し、ここに「大宜味村シークワサーの里」を宣言する。

平成17年9月30日



シークワサーの果実



シークワサーの里宣言の碑

発刊のことは

この度、村政史上2冊目となる『大宜味村史 通史編』の発刊を、万感の思い込めて村民にご報告させていただきます。

昭和54年に発刊された最初の通史は、先史古代から本土復帰の頃までの本村の歩みを簡潔にまとめたもので、内外から高い評価をいただきましたが、平成24年度にスタートした「新大宜味村史編さん基本計画」では、本土復帰以降の激動期を経て平成、令和の急速に発展する社会における大宜味村の来し方を記録するという目的に加え、「村民のための村史・村民と共につくる村史」を二つの柱として事業を進めるなか、各区にご協力を仰ぎながら、様々な分野の調査を丁寧に行って参りました。

その成果として、平成25年度の「シマジマビジュアル版」を嚆矢に、戦争証言や移民・出稼ぎ、民俗、言語など9冊の「大宜味村史」を世に送り出すことができ、このことは、村民皆様のご理解とご協力がなければ、到底成し得なかったことであり、正に「村民と共に創り上げた村史」だと自負しております。あらためて深謝を申し上げます。

10冊目となる本書『大宜味村史 通史』は、それらを網羅した締めくくりの最終巻となります。

明治41年の沖縄県及び島嶼町村制（特別制）施行によって大宜味村が誕生し、平成20年には村政施行100周年という節目を迎えましたが、本村の歴史を語るとき、大宜味間切の前身である田港間切が創設された1673年から遡る350年余の悠久の歴史の上に立って俯瞰する必要があります。

本書を繙くとき、元々は国頭間切と羽地間切の一地域に過ぎなかった村々が寄り集まり、時代をかたち造ってきた先人の足跡や文化によって“大宜味人氣質”が形成され、特色ある歴史が刻まれてきたことが理解できるはずです。そして、それらが血となり肉となり、現代の我々をかたち造っていることに思いが至るでしょう。

多くの村民が本書を手に取り、誇れる大宜味村の宝を見つけてほしいと祈念します。

最後の最後となりますが、限られた期間で、分野ごとの資料収集、調査、分析、執筆等など、膨大な作業に真摯に取り組み、10編もの発刊を成し遂げられた村史編纂委員及び専門部会委員に敬意を表すると共に、調整に奮闘した事務局の皆様に心からの労いを贈りたいと思います。

2025年（令和7年）3月

大宜味村長 友 寄 景 善

あいさつ

平成24年度からスタートした新大宜味村史編さん基本計画においては、これまで、「シマジマビジュアル版」（平成25年度）を起点に、「戦争証言集」（同26年度）、「シマジマ本編」（同27年度）、「移民・出稼ぎ編」（同28年度）、「民俗編」（同29年度）、「言語編」（令和1年度）、「人と自然編」（同3年度）、「写真集」（同4年度）を発刊し、最終年度となる令和6年度は「大宜味村史 資料編」に続き「大宜味村史 通史」発刊の運びとなりました。

これまでの道のりは決して順風満帆ではなく、さまざまな紆余曲折、停滞の時期を経て、当初の10年計画を3ヶ年延長し、令和6年度までの実質13年をかけて終結を見ることができました。

ほぼ毎年の発刊予定を謳った^{うた}新村史編さん計画を「絵に描いた餅」と評されたことは今でも忘れることができませんが、「絵に描いた餅」を現実のものとするために、編纂委員、専門部会委員と事務局は懸命に走り続け、多くの方々の叱咤激励に力をいただきながら、ここに、集大成となる「大宜味村史 通史」を形にすることが叶い感無量の思いです。

その間、平成22年に「準備室」が置かれた旧庁舎から、平成30年に旧大宜味小学校、令和5年には旧議会棟へと、二度の引越しを余儀なくされ、その度に膨大な書籍や資料、それらを納める多数の本棚等と共に、気の遠くなるような引っ越し作業とその整理に時間を取られ、最終年となる本年は、資料編、通史編の編纂作業を同時進行で行うという厳しい制約の中で、集大成となるこれらの編纂作業に十分な時間がかけられなかったことは遺憾ながら、「今できることを精一杯全うする」という姿勢で粛々と取り組んで参りました。

本書は、基本的に昭和54年発刊の『大宜味村 通史編』を踏襲したうえ、本土復帰以降から現代に至る大宜味村のあゆみを加筆し、可能な限り直近の事象まで取り上げるよう努めました。なお、既刊部分においては、明らかな誤りを正しその後の研究で新たに報告された事項を盛り込むなどの改訂を加えてあります。

何分、限られた期間で編まれ世に送り出されるため、誤りや不備もあろうかと存じますが、それらの課題を後進に委ねることをお許しください。

村史編纂事業は、当初から“村民と共に作る村史”を標榜し、分野ごとに^{しっかい}悉皆調査を行い、地域の方々には何度も時間のかかる調査にご協力をいただきました。村民のお力添えなくして本事業を成し遂げることは叶いませんでした。改めて感謝の意を表します。

最後に、事業の立ち上げから意欲的に取り組まれ、初代編纂委員長として適格な示唆をいただいた故新城繁正氏に、衷心より感謝を捧げたいと思います。

2025年（令和7年）3月

大宜味村史編纂委員会 編纂委員長 米 須 邦 雄

目 次

グラビア
発刊のことば
あいさつ
凡例
目次

第1章 自然の概況

第1節 地形	33
山地部 34 丘陵部 35 低地部 35	
第2節 地質	36
押川層 36 喜如嘉層 36 塩屋層 37 玉辻山層 37	
第3節 植物	37
(1) 山地・丘陵部の非石灰岩地のシイ林ーリュウキュアオキ・スダシイ群団ー 37	
(2) 河川沿いの群落 38	
(3) 山地・丘陵部の石灰岩地の林ーリュウキュウガキーナガミボチョウジ群団ー 38	
(4) 海岸・低地部のリュウキュウマツ林から風衝林への変遷 39	
(5) ビロウ林（大宜味御嶽のビロウ林） 39 (6) 海岸（砂浜）の群落 39	
(7) マングローブ林 40	
第4節 動物	44
(1) 哺乳類について 44 (2) 鳥類 45	
(3) 爬虫類 48 (4) 両生類 49	
(5) 河川生物（魚類・水生生物） 50 (6) 昆虫 53	
(7) 陸産貝・淡水棲貝類について 56	
第5節 自然（総括）ー多様な自然環境と生物相ー	58

第2章 先史古代

第1節 先史時代	63
第2節 ギスク時代の遺跡	67
ギスク時代のはじまりと按司の誕生 67 大宜味村のギスク 67	
第3節 国頭按司と根謝銘城	67
根謝銘城と按司 67 考古学的調査 68 大宜味按司 68 国頭按司 68	
按司の首里移住と国頭間切の誕生 69 屋嘉比川と貿易 69	
第4節 根謝銘城遺跡と遺物	70
根謝銘城遺跡の現状 70 調査の経緯 71 出土遺物 73 遺構 73	
調査の成果と今後の課題 74	

第3章 近 世

第1節	大宜味間切の創設	77
	島津の侵入と検地 77 間切の創設 77 間切内の村の推移 77	
	塩屋番所の設置 78	
第2節	番所機構と間切役人	79
	番所機構と間切役人 79 地頭代 79 惣耕作当・惣山当 80 夫地頭 80	
	捌庫 81 掟 81 文子及びその他の役人 82 地頭家 82	
	大宜味按司と御殿 83 大宜見殿内 83 脇地頭家 84	
第3節	土地制度	85
	古い土地制度 85 検地 85 仕明地(1) 86 百姓地と地割制度 86	
	地頭地 87 オエカ地 87 ノロクモイ地 88 仕明地(2) 88 明替畑 89	
	小地(匿田) 90 蘇鉄畑 91	
第4節	租税制度	91
	検地 91 租税 91 大宜味間切の貢租(1) 92 大宜味間切の貢租(2) 93	
第5節	農政と林業	93
	1. 間切の農政指導 93	
	蔡温時代の農政 93 大宜味間切の農業督励 94 ウコン 94 原山勝負 95	
	2. 間切の山林制度 96	
	杣山制度の成立 96 杣山の指導・監督 96 間切の杣山の種類 97	
	杣山の仕立替えと明替畑 98 杣山の保護・管理 99	
第6節	村行政と地組(引)制度	100
	村の行政 100 パール(地組) 100 引(1) 101 引(2) 101	
第7節	間切の疲弊と身売り	102
	間切の疲弊と下知役 102 インザ・ヤン人 102 模合仕明地の処分 103	
	備荒貯米 104	
第8節	異国船の来琉	104
	切支丹宗門改めと差出し 104 ペリー来航と塩屋湾調査 105	
	コラム 元文検地の印部石(ハル石) 108	

第4章 近 代

第1節	廃藩置県と土地整理	111
	1. 県政と旧慣制度の「温存」 111	
	琉球処分 111 県政のスタートと旧慣制度の温存 111	
	置県後の大宜味の状況 112	
	2. 土地整理事業 113	
	最後の地割り 113 土地整理 114 杣山処分(1) 114 杣山処分(2) 115	
	コラム 杣山処分と平良保一 116	
	3. 教育 117	
	会所 117 小学校の創設と推移 117 就学督励方法 118	

第2節	村政の展開	120
1.	町村制の施行	120
(1)	地方制度の推移	120
	特別制度 120 特別町村制 121	
(2)	村役場の移転問題	121
	役場移転問題発生 121 南方人民の動き 122	
	移転問題をめぐる確執 122 役場の移転 123 移転の背景 124	
2.	慢性的不況	125
(1)	蘇鉄地獄	125
	第一次世界大戦 125 蘇鉄地獄(1) 126 蘇鉄地獄(2) 126	
	蘇鉄 127 質屋の設置 128 風俗改良運動 129 消費節約 130	
	禁酒運動 132 役場庁舎の建設 133	
(2)	大兼久の漁業	134
	漁業と大兼久 134 鰹業 135 漁民の県外進出 136 南洋へ 136	
	魚の販売 136 商圈 137	
(3)	大宜味村経済更生計画	138
	計画樹立の背景 138 経済更生計画(1) 139 経済更生計画(2) 139	
	経済更生計画(3) 141 経済更生計画(4) 141 沖縄県振興計画 142	
3.	出稼と大工	143
(1)	出稼・移民	143
	社会的背景 143 移民 144 出稼(1) 145 出稼(2) 146	
(2)	大宜味大工	147
	大工(1) 147 大工(2) 149 大工(3) 150	
4.	村政革新運動	151
	当時の沖縄の状況 151 村政革新運動おこる 152 大宜味村の政治状況 152	
	村政革新運動の展開(1) 153 村政革新運動の展開(2) 154	
	村政革新運動の展開(3) 155 村政革新運動の展開(4) 156	
	村政革新運動の展開(5) 157 村政革新運動の展開(6) 158	
	村政革新運動の展開(7) 158 村政革新運動の展開(8) 159	
	村政革新運動の展開(9) 160 村長辞任 160	
5.	農林水産業	161
	産業(1) 161 産業(2) 162 水稻 163 甘藷 164 甘蔗 164 林業 165	
	津波の造林 166 畜産業 167 芭蕉布 168 水産業 169 その他 170	
6.	教育	171
	学校教育(1) 171 学校教育(2) 172	
	学校事件(1) 172 学校事件(2) 173 社会教育 175	
7.	交通・通信の発達	176
	道路開通以前 176 道路の整備 177 電信架設と郵便局移転 178	
	帆屋(フーヤー) 179	

第3節	戦時下の村政	180
1.	戦時下の村民生活 180	
	戦時下の村政 180 教化村 181 部落常会と隣組 182 翼賛団体 184	
	戦時教育(1) 186 戦時教育(2) 187 食糧増産運動(1) 189	
	食糧増産運動(2) 190 伊江島徴用 192 女子挺身隊 194	
2.	沖縄戦と村民犠牲 195	
	疎開者受入れ 195 避難生活 197 大宜味防衛隊(1) 199	
	大宜味防衛隊(2) 200 護郷隊の編成 202 護郷隊の戦闘 203	
	敗残兵と避難民 205 収容所へ 207 戦争犠牲者 208	
第5章 戦 後		
第1節	戦後の村政	211
	戦後の占領行政 211 辺土名市の誕生 211 本土より6ヵ月早い婦人参政権 212	
	大宜味村復活 212 疎開者で膨れた人口 213	
	警察隊長、ラブレス海軍中尉 213 村制の推移 215	
	旧日本円をB軍票、新日本円に切換え 216 食糧確保の農作業 217	
	米軍による食糧と衣類の無償配布 217 専制的な米軍の衛生管理 218	
	DDT革命 219 戦後の医療体制 220 分村陳情の却下 220 工作隊時代 221	
	通信・交通 222 復帰運動 223	
第2節	戦後の教育	225
	部落単位の学校 225 8・4制から6・3・3制へ 225	
	開校1年で消えた実業学校 226 辺土名高校の誕生 226	
	男子部は辺土名、女子部は喜如嘉 226 男女共学と村内誘致 227	
	育英会 228 青年会活動 228 婦人会活動 229 社会教育学級 229	
	公民館 230	
第3節	開拓移民	230
1.	八重山契約開拓移民 230	
	開拓移住の契機 230 初の契約開拓移民 231	
2.	八重山計画開拓移民 232	
	開拓移住行政の本格化 232 開拓地の台風被害と送出地の対応 233	
	移住政策の展開と政策意図 234 開拓移住地の相対的安定化 235	
3.	江洲開拓移住 238	
	沖縄北部開発計画 238 江洲開拓への入植状況 238 開拓地の安定化の方向 239	
4.	戦後開拓移住関係の記録 241	
第4節	戦後の産業	243
1.	いち早くなされた農業基盤整備 243	
2.	サトウキビ 243	
3.	パインアップル 245	
4.	みかん 246	
5.	い草 247	
6.	畜産 248	
7.	水産業 248	
8.	芭蕉布 249	
9.	陶業 250	

第6章 復帰後

第1節 農林水産業	253
1. 農業全般の状況 253	
就農者数 253 耕地面積 253 耕作状況 253	
サトウキビとパイナップル 254 果樹 255 野菜 255 その他 255	
2. シークワサー 255	
(1) 停滞・苦悩の時代から活路が見えるまで 255	
(2) 一躍脚光を浴びる 257	
(3) シークワサーの里宣言 258	
(4) シークワサー産地であり続けるために 259	
(5) シークワサー酢 SKS+S の誕生 259	
3. 畜産業 260	
4. 林業 261	
5. 水産業 262	
第2節 商工業	265
1. 商業 265 2. 工業・新規産業 266 3. 工芸 268	
第3節 観光業	268
コラム 生活と共にあった山原の自然が世界遺産に 271	
第4節 福祉	272
1. 大宜味村社会福祉協議会 272 2. 児童福祉 272 3. 障がい者（児）福祉 274	
4. 高齢者福祉 276 5. 保健医療関係 279 6. 国民健康保険 284	
第5節 教育・文化	288
1. 小学校・中学校の沿革 288 2. 幼稚園教育 290	
3. 幼保連携型総合施設整備（おおぎみこども園）設置の経緯 291	
4. 中学校の統合 296 5. 小学校の統合と学校の移転 297	
6. 生涯学習について 301 7. 辺土名高等学校 303	
第6節 全国規模のスポーツ大会の開催	305
1. 復帰記念沖縄特別国民体育大会「若夏国体」 305	
2. 第42回国民体育大会「海邦国体」漕艇競技会の開催 305	
3. 平成22年度全国高等学校総合体育大会ボート競技大 「美ら島沖縄総体2010ボート競技大会」 324	
第7節 生活環境	337
1. 塩屋大橋 337 2. 農村総合整備モデル事業 349 3. 道路整備 350	
4. 簡易水道事業 352 5. 下水道の整備 353 6. し尿・ごみ処理の推進 354	
7. 火葬場の整備 357 8. 消防・救急関係 357 9. 防災・交通安全・防犯対策 361	
10. 住宅地の整備・確保 366 11. 情報通信 367	
第8節 村政の進展	369
1. 村制90周年・100周年・111周年記念 369 2. 新庁舎建設 370	

3. 公有水面埋立事業	373
第9節 その他	376
1. 大保ダム	376
2. 世界自然遺産登録	377
3. 新型コロナウイルス感染症について	380

第7章 民 俗

1. 大宜味村のマク（マキヨ）とムラ・シマ	387
2. 大宜味村のマクの分布	387
3. 大宜味間切・村の変遷	387
4. 間切役人	390
5. 大宜味間切内のノロ管轄	392
6. 大宜味村の民俗	393

第8章 方 言

第1節 大宜味村の方言の概要	397
1. はじめに	397
2. 大宜味村の方言の位置	397
第2節 大宜味村各集落（シマ）の方言一覧表について	398
第3節 大宜味村及び各字の方言の特徴	404

第9章 災 害

第1節 自然災害	409
1. 身近に起こり得る自然災害	409
2. 史料に見る大宜味村の自然災害	409
3. 土砂災害と背中合わせの大宜味村の生活環境	412
4. 大宜味村で過去に起きた土砂災害	414
第2節 シャーロット台風の爪痕	419
1. 気象状況	419
2. 地誌にみる被害状況	422
3. 近年の土砂災害	429
第3節 地震と津波	430
1. チリ地震津波	430
2. 押し寄せる軽石—福德岡ノ場の海底火山噴火	433
第4節 水害・高潮など	434
第5節 河川での水難事故	440
1. 平南川での遭難事故	440
2. 小さな川の危険性	441
3. 安全な川遊びのために	442

第10章 文化財

大宜味村の猪垣（ヤマシシガキ）	445
塩屋ウフンチャのハスノハギリ	445
塩屋湾のウンガミ	446
田港御願の植物群落	447
喜如嘉板敷海岸の板干瀬	447
喜如嘉の芭蕉布	448
大宜味御嶽のビロウ群落	448
大宜味村役場旧庁舎	449
津波のビーチロック	449
國頭郡大宜味間切各村全圖及び字圖	450

第11章 各字の概要

田嘉里	453
謝名城	459
喜如嘉	466
饒波	469
大兼久	471
大宜味	476

根路銘 480 上原 489 塩屋 491 屋古 498 田港 503 押川 506 大保 509
白浜 514 宮城 517 江洲 519 津波 523

第12章 共同売店

1. 陸の孤島山原で生まれた共同（売）店と協同組合 531
2. 村内各字共同店のあゆみ 532
- コラム みんなで共同売店を応援しよう！目指せ、世界遺産！ 544

第13章 各種団体

- 第1節 青年会 547
1. 地域における青年の役割 547
 2. 国家目的の手段としての青年団 547
 3. 戦後青年会の胎動 548
 4. 沖縄青年連合会の誕生 549
 5. 日本青年団協議会への加盟 549
 6. 沖縄産業開発青年隊の創設 549
 7. 祖国復帰運動 550
 8. 大宜味村の青年会 554
- 第2節 婦人会 556
1. 大宜味村婦人会の足跡 556
 - (1) 洗骨廃止・火葬場設置運動と大宜味村婦連結成 557
 - (2) その他の活動 561
 2. 大宜味村婦人連合会のあゆみ 565
- 第3節 老人クラブ 568
1. 沖縄の老人福祉の成り立ち 568
 2. 大宜味村老人クラブ結成の胎動 573
 3. 大宜味村老人クラブ連合会のあゆみ 574
 4. 大宜味村老人クラブ連合会歴代役員 575
 5. 長寿村宣言 576
 6. 大宜味村老人クラブ連合会創立50周年記念講演 578

第14章 郷友会

- 第1節 郷友会 585
1. 郷友会誕生の社会的背景 585
 2. 郷友会の活動 588
 3. 郷友会のこれから 591
- 第2節 海外と沖縄を結ぶ動き 593
1. 母県・母村との交流 593
 2. 世界のウチナーンチュ大会 594
 3. 移住者子弟研修生受入事業 594

附録

1. 年表 597
2. 歴代村長、助役・副村長、収入役、教育長 639
3. 歴代議長、副議長、議員 643
4. 世帯数・人口（男女別） 653
5. 歳入決算額、歳出決算額 654

- あとがき 666
- 参考文献 667
- 索引 672
- 奥付 690

第1章

自然の概況



田港御願の植物群落（国指定天然記念物）